第Ⅲ部
研究の総括







第１章　学校評価

１　はじめに

本年次研究を学校評価(全校生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価)の結果から見取る。アンケートの質問項目は，本校の教育目標「自立と共生の力をもつ生徒の育成」の具現化を図り，その達成状況や達成に向けた取組の適切さなどを評価するために設定した。その中から，本校の今年度の研究実践の有効性について考察できると考える質問項目を選び，その結果を以下にまとめる。また「論理的に思考し表現する学び合い」に関する生徒の姿を見取るため，平成30年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査（３年生４月実施）の結果を参考にする。

２　全校生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価から

表１の評価の数値は，評価基準を４段階で設定してアンケート調査を行い，その平均値を求めたものである。生徒及び保護者のアンケートでは，４(そうだと思う)，３(だいたいそうだと思う)，２（あまりそうだとは思わない)，１（まったく思わない)，０（分からない）と設定し，教員の自己評価では実施率または達成率で，４（80%以上)，３（70%以上)，２（60%以上)，１（60%未満)と設定している。また総合評価は，生徒，保護者，教員の評価平均値が3.2ポイント以上でA，2.5ポイント以上でB，2.5ポイント未満でCとしている。

(1)　意欲的な学習活動の推進について

①～④のいずれの項目もおおむね肯定的な評価になっている。これは，生徒の学習意欲の高まりを基にした問題解決型の学習展開や題材の工夫，根拠を明確にしながら説明させる場面やパフォーマンス課題の設定など，論理的に思考し表現し，考えを広げ深められる授業を多く実践した成果と考える。一方，①の項目では生徒の評価が低下し，④の項目では教員の評価が依然低いことから，研究の推進が，生徒にとって基礎・基本が確実に身に付き，探究心の高揚を味わい，伸びたという達成感が得られるよう，指導や評価を再検証し，指導改善に努める必要がある。

(2)　主体的な生徒活動の推進について

⑤・⑥のいずれの項目も生徒は3.3を超える評価になっている。これは，生徒が附中生としての自覚のもと，自治意識を持って自らの学校生活を見つめ直し，改善に努めようとしている成果と考える。

(3)　充実した道徳教育の推進について

⑦～⑨のいずれの項目も生徒，保護者の評価は高い。これは，道徳の時間をはじめとする様々な「学び合い」の実践の積み重ねにより，多くの生徒が自己理解や他者理解を深め，仲間意識を持ち，互いに認め合える学級集団であると感じるようになった成果と考える。

表１　生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価

具体的な評価指標	評価			
	生徒	保護者	教員	総合
①　基礎・基本を確実に定着させるための学習指導を行うことができたか。	3.1 (3.2)	3.0 (3.0)	3.2 (3.1)	B (B)
②　基礎・基本を活用し，論理的に思考し表現する場（学び合い）を設定し，思考を広げ深め合う手立てを工夫することができたか。	3.1 (3.2)	3.4 (3.3)	3.3 (3.1)	A (B)
③　学ぶ楽しさ（探究心の高揚）を味わわせるために学習のねらいに応じた指導を工夫することができたか。	3.2 (3.2)	3.3 (3.2)	3.3 (3.3)	A (A)
④　学びの振り返り（自己評価）を行い，生徒自らが「育つ・伸びる」指導改善に向けて工夫することができたか。	3.2 (3.3)		2.8 (2.6)	B (B)
⑤　学校行事等において生徒が自信と誇りを持ち，継続して挑戦するための手立てを工夫することができたか。	3.3 (3.4)		3.2 (3.1)	A (A)

⑥ 学校行事等において仲間と共にやり抜く場を設定し，自己実現に向けて切磋琢磨できるための手立てを工夫することができたか。	3.5 (3.5)	3.3 (3.2)	3.1 (3.2)	A (A)
⑦ 生徒が有用感を感じる道徳の時間の指導の工夫をすることができたか。	3.3 (3.1)	3.1 (3.2)	2.8 (2.6)	B (B)
⑧ 仲間意識を高め，互いを認め合い，励まし合う支持的風土のある集団づくり（学級・学年等）のための手立てを工夫することができたか。	3.6 (3.6)	3.4 (3.3)	3.1 (3.0)	A (A)
⑨ 他者との学び，他者からの学びによる自己理解や他者理解を深めるための手立てを工夫することができたか。	3.3 (3.3)		3.1 (3.0)	B (B)

上段は本年度，下段（ ）内は昨年度の数値を示す。

3 全国学力・学習状況調査（3年生4月実施）の結果を踏まえて

表2より，⑩～⑰のいずれの項目も1と2で回答する生徒は，全国の割合より大きい。⑩～⑫の項目から，生徒が地域や社会のことを考え，役に立ちたいという強い意志を持っていることが分かる。これは「持続可能な社会を支える」ために必要な資質・能力を「逆向き設計論」に基づいて具現化して示した学習指導をしたり，「自治」を意識させた教育活動を実践したりしてきた成果と考える。また，⑬～⑮の項目から，生徒が主体的に学習に取り組むとともに，話合いの意義を理解していることが分かる。これらは，問答ゲームや言語活動を積極的に取り入れた授業実践を継続してきた成果と考える。⑯・⑰の項目からは，多くの生徒が教科を学ぶ意義を理解し，学びを人生や社会に生かそうとしていることが分かる。これからの時代に必要な資質・能力を身に付けようと意識していることの表れと言えよう。

表2 全国学力・学習状況調査の結果

質問事項 選択肢 1：そう思う 2：どちらかといえば，そう思う 3：どちらかといえば，そう思わない 4：そう思わない 0：その他・無回答	選択肢				
	1	2	3	4	0
⑩ 人の役に立つ人間になりたいと思いますか。	83.0 (70.6)	14.4 (24.3)	1.3 (3.5)	1.3 (1.5)	0.0 (0.2)
⑪ 地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか。	29.4 (20.2)	46.4 (39.3)	15.7 (27.9)	8.5 (12.5)	0.0 (0.1)
⑫ 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。	15.7 (10.7)	37.9 (28.1)	32.0 (39.4)	14.4 (21.7)	0.0 (0.1)
⑬ 1，2年生のときに受けた授業では，課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいたと思いますか。	41.8 (26.4)	47.7 (47.5)	9.8 (20.7)	0.7 (5.3)	0.0 (0.1)
⑭ 自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか。	24.2 (16.7)	47.7 (37.3)	24.2 (33.3)	3.9 (12.5)	0.0 (0.2)
⑮ 生徒の間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思いますか。	64.7 (32.5)	28.8 (43.8)	6.5 (17.2)	0.0 (6.3)	0.0 (0.2)
⑯ 数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか。	20.9 (11.9)	34.0 (26.6)	35.3 (37.5)	9.8 (23.8)	0.0 (0.1)
⑰ 理科の授業で，観察や実験の進め方や考え方が間違っていないか振り返って考えていますか。	31.4 (20.7)	43.1 (38.2)	22.2 (29.6)	3.3 (11.3)	0.0 (0.1)

上段は本校生徒，下段（ ）内は全国の結果のそれぞれの割合（%）を示す。

4 おわりに

研究実践が，生徒に将来，「持続可能な社会」の担い手になるということを自覚させるとともに，生きて働く資質・能力の育成につながっていると，学校評価などから見取ることができた。また，生徒は，他者との対話を通して論理的に思考し表現することが，共に学び，考えを広げ，深め，学習や更には生活の場面において大きな意義があると理解できていることが分かる。

今後も本実践を継続するとともに，将来の社会で生きて働く実践力の育成に関わる資質・能力，とりわけ「学びに向かう力・人間性等」の涵養につながるよう，研究推進をしていく必要があると考える。

第２章　最終年次研究のまとめ

これまでの研究を通した生徒の変容の具体や成果と課題については，各教科の実践によるところである。ここでは，各教科をまとめた研究の成果と課題，生徒の変容や全校生徒への意識調査，教員アンケートを考察することを通して３か年の研究のまとめとする。

１　各教科をまとめた研究の成果と課題，生徒の変容や全校生徒への意識調査から

(1)　逆向き設計論に基づく指導の充実について

各教科の実践においては，どの教科においても，逆向き設計論に基づく指導計画を生かした指導により，教科の本質を捉えて教科の学習内容を理解し，活用していく生徒の姿が見られた。各教科における実践を通した主な成果と課題を**表１**に示す。

表１　各教科における主な研究の成果と課題

教　科	成　　果	課　　題
国　　語	単元を通して課題意識を持続させるパフォーマンス課題の設定，主張・事実・理由づけを意識した問題解決や振り返りの工夫を行った。その成果として，対話の視点を焦点化し，文中にある言葉を事実として，その意味を経験や解釈から正しく，豊かに捉え，よりよく伝え聞き自己・他者理解を深め，主体的に問題解決することができた。	学習課題を個々で設定する場合は，学習課題どうしをつなげるコーディネートが必要。 パフォーマンス課題の問い方やルーブリックの規準について，適切なキーワードを示して本質に迫るなど内容の検討が必要。
社　　会	社会的事象を自分ごととして捉え，６Ｗ１Ｈや持続可能性にてらして熟考させ，自分の意見を基に表現し問題解決に迫るパフォーマンス課題，ＩＣＴ等を活用し見方・考え方を可視化し明確にした学び合いの工夫を行った。その成果として，持続可能な社会に参画・志向しよりよい自分の在り方を思い描き，身に付けた見方・考え方を働かせて主体的に問題解決することができた。	持続可能性を志向しつつも，発達段階に応じた適切な問題の設定や，教科と乖離させないための「見方・考え方」の意識付けが必要。 それぞれの分野で求められる見方・考え方を働かせて思考・判断できる指導やパフォーマンス課題・ルーブリックの開発が必要。
数　　学	日常生活や社会における疑問から問題解決を図るパフォーマンス課題，様々な学習形態から論理的・批判的思考を発揮して教科の本質に迫る学習指導，解決の過程や結果を可視化しメタ認知と価値の自覚を促す振り返りや評価の工夫を行った。その成果として，育てたい数学的な見方･考え方を獲得し，他者と協働して主体的･論理的に問題解決することができた。	単元や領域を越えたパフォーマンス課題の開発，問題解決の過程や結果から新たな問いを見いだす指導の工夫が必要。 妥当性・客観性のある評価の研究が必要。
理　　科	身近な事象を題材として疑問や驚きから本質に迫る問題の設定，合意形成を図る学習形態とＩＣＴ等を活用した思考の可視化を工夫した学び合いを行った。その成果として，科学的根拠を基に事象を判断し，多様な見方・考え方が共有され判断や根拠が洗練され，より確かで豊かな知識や経験から仕組みを説明し問題解決することができた。	パフォーマンス課題におけるねらいに合った適切な課題の問い方，持続可能な社会を志向した問い方や振り返りについて検討が必要。 合意形成を図る学び合いでは視点の設定を精査することが必要。 学び合いの前提となる知識・技能のレディネスの形成が必要。
音　　楽	音楽的要素に着目させ，個人の考えを持たせた上での練り合いの設定，思考や表現の過程が見えるワークシートの工夫，写真等を用いた多様な表現の工夫，思考と表現を往還させる活動の充実を行った。その成果として，学習過程を把握しながらイメージを共有し，思いや意図を持って表現したり聴いたりして，よりよい曲作りに生かすことができた。	根拠となる音楽的要素の明確化が必要。 ねらいとする力を効果的に育てるための学習形態や展開の工夫が必要。 音楽的思考が見える手立ての工夫が必要。

美　術	身近な事象をよりよい生活を志向して，感性と美術的要素を結び付け，見方･考え方を基に，思考した内容を作品や言葉，文章など多様に表現させること，それを根拠を基に説明し共有する話合いの工夫を行った。その成果として，事象にひそむ美術の働きについて気付き，目的や場面に応じて身に付けた見方・考え方を生活と関連付けて新たな表現を見いだすなど，感性を豊かにしていくことができた。	具体的な事象と教科を往還する学習の展開が必要。 パフォーマンス課題における深い学びにつなげるための，美術的要素に着目した発問や課題の設定が必要。 持続可能な社会を意識した学習の視点の提示が必要。
保健体育	互いの考えを伝え合う場面を重視した小集団活動の工夫，保健と体育領域を関連させた学習指導，ＩＣＴを活用し考えを可視化しつつ言語技術を生かして合意形成を図る指導，振り返りの工夫を行った。その成果として，運動有能感が高まり，主体的に運動に関わる態度や問題解決に向けた論理的思考力・表現力が高まった。	パフォーマンス課題が実際に有効な場面となっているか妥当性の検討が必要。 すべての生徒が運動有能感を高めることができる方策を考える必要がある。
技術・家庭	実際の生活場面を想定した問題解決的な学習，他教科との関連を図った指導，ルーブリックによる相互評価の工夫，家庭など実生活での実践に結び付ける振り返りの工夫を行った。その成果として，事象を多面的，多角的に考察し問題解決を行い，生活の中で生きて働く思考力･表現力が身に付き，実生活に生かして改善していこうとする態度が高まった。	他教科の関連を図るための指導時期の調整が必要。 生徒が実生活において実践可能な課題かどうか検討が必要。
英　語	事象を６Ｗ１Ｈを明らかにしながら捉え，再話や要約，イラスト化などを基にしたインタラクティブな指導，リテラチャー・サークル等による対話的な学びの工夫を行った。その成果として，事象や自他について理解を深め，経験や意見，感想を交えた考えを伝え合い，よりよいコミュニケーションを図り，自律的な学習につなげることができた。	ペア以外にも，複数で会話を行ったり議論をしたりする場面の設定が必要。 パフォーマンス課題における評価項目の精選，課題の焦点化が必要。 よりよいコミュニケーションを実現するための基本的な知識や語彙の定着が必要。
行く河	効果的な学び合いのための学習方法の工夫，持続可能な社会を志向し実践につなげる振り返り，実践から学習を振り返る工夫を行った。その成果として，多様な考えを吸収し，学習の意義や良さを実感しつつよりよい生活を送るための問題解決力や実践力を身に付けることができた。	自尊感情の高まりについて客観的な評価の検討が必要。 ねらいとする価値につなげるための更なる効果的な指導法の開発が必要。

これらのことから，どの教科においても，逆向き設計論に基づく構想における，

①各教科の本質を明確にして迫る「本質的な問い」「永続的な理解」の設定

②各自・教科の研究テーマに照らしつつ，論理的に思考し表現する学び合いを図る学習指導の工夫

③各教科の本質を身に付けさせるとともに，持続可能な社会を志向した自分の在り方について考えさせるパフォーマンス評価の設定

を行うことで，生徒の成長に相乗効果として現れたと考える。

成果や課題をまとめると以下のことが挙げられる。（成果○，課題▲）

○　各教科の本質を明確にしつつ，持続可能な社会を志向した課題，学び合い，振り返りの設定が，学校全体として育てたい持続可能な社会を支える資質・能力や論理的思考力などの汎用的な力の育ちにつなげるために重要であった。その学習を充実させるためにも，問い，課題，評価において，本質に迫るためのタイトル，キーワードの設定が非常に重要であった。特にパフォーマンス課題とルーブリック評価におけるキーワードを設定することは，教師も生徒も目標が明確になり，よりよい活動や評価につながった。

○　対話的な学びについては，学習形態や学習方法（問答ゲーム，ジグソー学習やリテラチャー・サークル等による役割分担学習，合意形成，要約，再話等）の工夫，思考の可視化を図りよりよい表現につなげるＩＣＴ等の活用（タブレット，ロイロノート，コミュニケーションボード）が効果があった。これらの取組を通して，生徒は各教科の内容を多面的・多角的に理解するとともに，他の生徒から多様な見方・考え方を取り入れ，よりよく表現するなど，自分の考えを再構築し，主体的・論理的に問題解決することができた。その積み重ねにより，自分が身に付けた見方・考え方を生かして，以降の学習に自信を持って意欲的に取り組む姿が見られた。

○　持続可能な社会を志向する視点を盛り込み，学んだことを実際に活用するパフォーマンス課題やルーブリック評価，及び本質的な問いに対する振り返りの場面を工夫することにより，生徒は教科の本質に迫る理解を深め，持続可能な社会を支える資質・能力を身に付け，以降の学習や生活に生かしていこうとする態度が育った。

▲　持続可能な社会を志向することと，教科の本質に迫ることのバランスを検討し，本来の教科指導と乖離しないようにする必要がある。その上で，学習と実生活での実践が往還する学習の工夫を行い，深い学びにつながるようにする。

▲　教科の本質に迫るための，教科の要素に着目した指導，妥当性のあるパフォーマンス評価の設定，新たな問いを生み出す展開の工夫が必要である。

▲　教科間で関連を図るためのカリキュラム・マネジメントを検討し，より効果的な指導につなげる。

(2)　言語技術教育を取り入れた学習活動の展開について

本校が３年間取り組んだ言語技術教育について，生徒の意識調査（**資料１**）から考察する。資料は平成28年度から平成30年度までの調査結果における，現３年生の経年変化と全校の値を用いた。

	アンケート内容 ※回答　4（そう思う）　3（だいたいそう思う） 2（あまりそう思わない）　1（まったくそう思わない）	「4」・「3」と回答した生徒の割合（%）					
		1年生→2年生→3年生			全　校		
		H28	H29	H30	H28	H29	H30
①	問答ゲームで質問に答えることが好きである	85	80	88	87	84	86
②	問答ゲームで質問にすらすらと答えられる	63	69	82	72	80	74
③	問答ゲームで質問をすることが好き	81	72	81	81	78	78
④	問答ゲームでうまく質問ができる	55	59	70	62	71	63
⑤	学級でのスピーチで，発表をすることは苦ではない	54	47	79	54	61	75
⑥	学級でのスピーチで，内容を分かりやすく伝えられている	57	57	66	60	68	63
⑨	各教科の授業で調べたことや考えたことを説明することが好きである	66	67	72	70	75	69
⑩	各教科の授業で調べたことや考えたことを上手く説明できている	62	59	66	62	70	63
⑪	相手に分かりやすく伝える力が高まっている	91	88	89	90	88	88
⑫	金曜の朝の時間（言語技術教育）で学んだことが，学習や生活などで役立っていることがある	「はい」として事例を挙げている生徒の割合（%）					
		87	97	100	84	97	98

資料１　言語技術教育に関するアンケート
（28年度から30年度までの，現３年生の経年比較と全校の比較）

調査の結果から，現３年生の育ちとして，２年次には評価が下がったものの，３年次には上昇し，ほとんどの項目で肯定的な評価が70%を上回った。これは，２年次において，１年次より自分自身を客観的に捉えることができるようになったことや，発達段階に応じた言語技術教育を構想・実施する中で更にレベルの高い課題に取り組んだ結果，厳しい自己評価をする生徒が増えたためだと考える。しかし，３年次には，言語技術が身に付き，各教科の学習や生活の場面で生かされてくるようになったことで，言語技術をよりよく使いこなすことに自信が持てるようになったためだと考える。⑫「言語技術教育が役立っている」の項目が３年次には100%となったこともその現れであると考える。

全校の数値の変容からは，６つの項目で肯定的な評価が70%を上回ったものの，残り４つは２年次から減少した評価となった。⑤「発表することへの苦手意識」は薄まり，⑪「分かりやすく伝える力の高まり」は感じているものの，④⑥⑩「よりよく質問する」「よりよく説明する」姿にまで十分には至っていないという生徒がいることから，身に付けた言語技術を実践の場におい

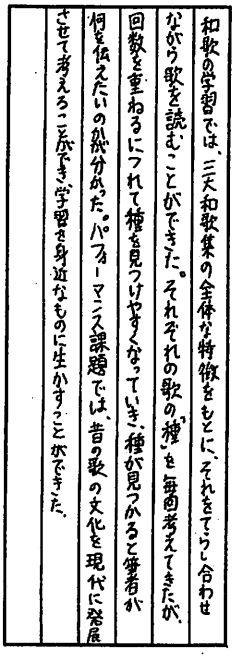
て発揮していくことに課題があることが分かる。ただ，⑫「言語技術教育が役立っている」の項目が３年次には98％となっていることから，言語技術教育が学習や生活の向上に効果があったと考える。

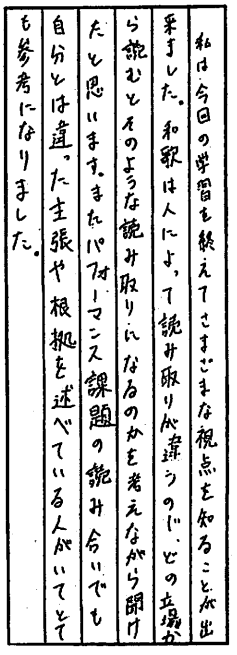
以上のことから，言語技術教育を取り入れた学習活動を全校及び各教科で展開したことにより，生徒は身に付けた言語技術を以降の学習や生活に生かしていくなど，論理的に思考し表現する力の育ちに大変効果があったと考える。更に発達段階に応じた言語技術教育を構想・実施するとともに，身に付けた言語技術を実践の場で発揮して行動していこうとする機会を設定・推進していくことで，生徒が自信を持って学習や生活に生かしていくことができるようにしたい。

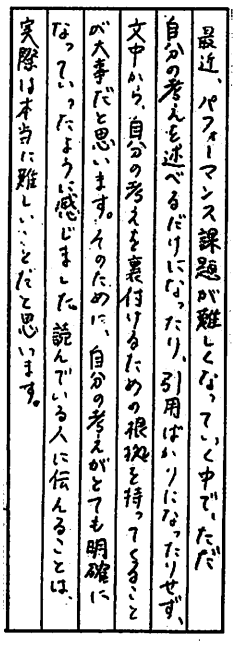
(3) 資質・能力が育つ評価（パフォーマンス評価等）の工夫について

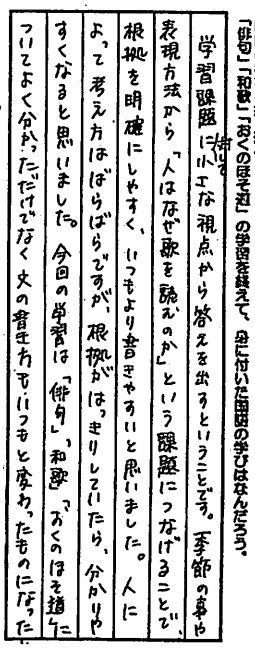
パフォーマンス評価の具体は各教科の実践によるところである。ここでは，主に国語科・数学科・行く河における，パフォーマンス評価を通した生徒の学びの振り返りの記述と考察を踏まえて，教科全体として育った生徒の姿を考察する。

（国語科での学びの振り返り）


和歌の学習では、三大和歌集の全体的な特徴をもとに、それをてうし合わせながら歌を読むことができた。それぞれの歌の"種"を毎回考えてきたが、回数を重ねるにつれて種を見つけやすくなっていき、種が見つかると筆者が何を伝えたいのか分かった。パフォーマンス課題では、昔の歌の文化を現代に発展させて考えることができ、学習を身近なものに生かすことができた。

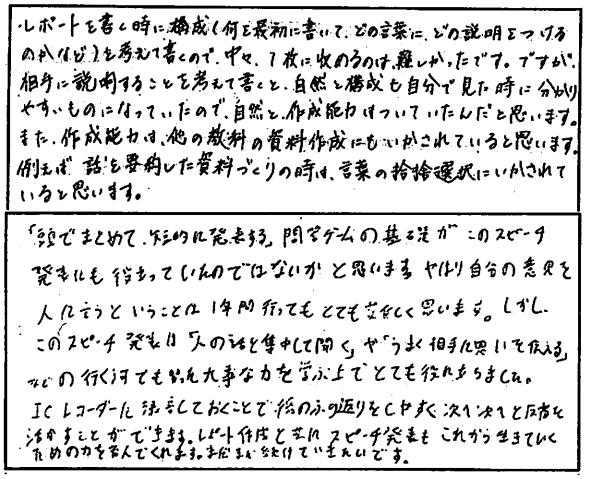

私は今回の学習を終えてさまざまな視点を知ることが出来ました。和歌は人によって読み取り方違うので、どの立場から読むとそのような読み取りになるのかを考えながら聞けたと思います。またパフォーマンス課題の読み合いでも自分とは違った主張や根拠を述べている人がいてとても参考になりました。


最近、パフォーマンス課題が難しくなっていく中で、ただ自分の考えを述べるだけになったり、引用ばかりになったりせず、文中から、自分の考えを裏付けるための根拠を持ってくることが大事だと思います。そのために、自分の考えがとても明確になっていたように感じました。読んでいる人に伝えることは、実際は本当に難しいことだと思います。


○国語の学びを振り返ろう
「俳句」「和歌」「おくのほそ道」の学習を終えて、身に付いた国語の学びはなんだろう。
学習課題に沿って小工な視点から答えを出すということです。季節の事や表現方法から「人はなぜ歌を読むのか」という課題につなげることで、根拠を明確にしやすく、いつもより書きやすいと思いました。人によって考え方はばらばらですが、根拠がはっきりしていたら、分かりやすくなると思いました。今回の学習は「俳句」「和歌」「おくのほそ道」についてよく分かっただけでなく、文の書き方も以前と変わったものになったと思いました。

生徒の記述からは，教科特有の見方・考え方を発揮して授業の本質「人はなぜ歌を読むのか」に迫る姿や，根拠を持って相手に伝えることや，相手の主張を根拠に注目しながら読むことなどの汎用的な力を身に付け，他の教科等で生かしていきたいという姿が見られた。

（数学科での学びの振り返り）

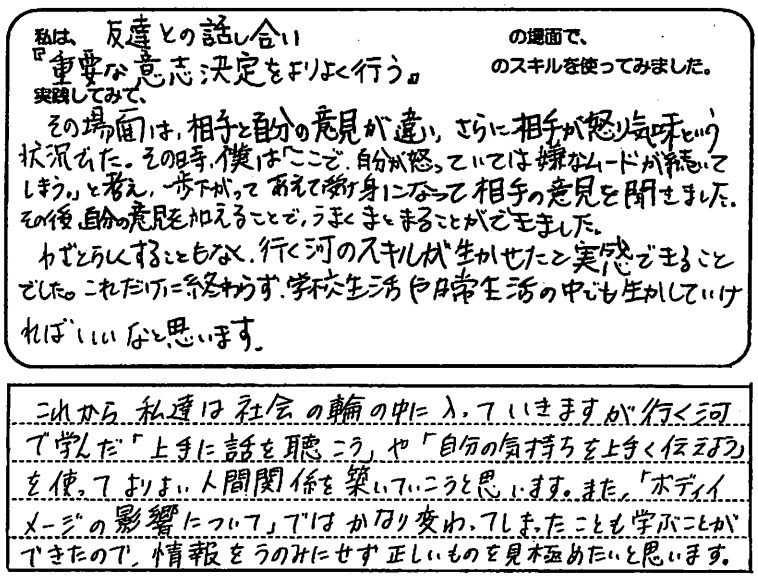

レポートを書く時に構成（何を最初に書いて、どの言葉に、どの説明をつけるの順序）を考えて書くので、中々、1枚に収めるのは難しかったです。でも、相手に説明することを考えて書くと、自然と構成も自分で見た時に分かりやすいものになっていたので、自然と、作成能力もついていたんだと思います。また、作成能力は、他の教科の資料作成にもいかされていると思います。例えば「話」を要約した資料づくりの時は、言葉の拾捨選択にいかされていると思います。

「話でまとめて、主旨の引き出す」問答ゲームの基礎がこのスピーチ発表にも役立っているのではないかと思います。やはり自分の意見を人に伝えるということは、1年間行っても、とても大切だと思います。しかしこのスピーチ発表は「人の話を集中して聞く」や「うまく相手に質問を伝える」などの行く河でも学んだ大事なカを学ぶ上でとても役立ちました。
1Cレコーダーに録音しておくことで、振り返りをすぐに次に活かすことができます。レポート作成とスピーチ発表もこれから生きていくためのカを与えてくれます。手放さず続けていきたいです。

生徒の記述からは，「問答ゲーム」の取組におけるよりよい伝え方の学びを活用して，伝えたいことを端的に伝えるための要約を意識した資料作りやスピーチが身に付いた姿が見られた。

また，数学でのスピーチや資料作成が他の教科の取組にも生かされ，汎用的な力の育ちにつながり，よりよく生きていくために価値があると実感している姿が見られた。

（行く河での学びの振り返り）


私は、友達との話し合いの場面で、『重要な意志決定をよりよく行う』のスキルを使ってみました。
実践してみて、
その場面は、相手と自分の意見が違い、さらに相手が怒り気味という状況でした。その時、僕は「ここで、自分が怒っていては嫌なムードが続いてしまう。」と考え、一歩下がって、あえて受身になって相手の意見を聞きました。その後、自分の意見を加えることで、うまくまとまることができました。
わざとらしくすることもなく、行く河のスキルが生かせたと実感できることでした。これだけに終わらず、学校生活や日常生活の中でも生かしていければいいなと思います。

これから私達は社会の輪の中に入っていきますが行く河で学んだ「上手に話を聴こう」や「自分の気持ちを上手く伝えよう」を使ってよりよい人間関係を築いていこうと思います。また、「ボディイメージの影響について」ではかなり変わってしまったことも学ぶことができたので、情報をうのみにせず正しいものを見極めたいと思います。

生徒の記述からは，生活の中で直面する問題について，学んだスキルを実際に発揮して解決することができたことに自信を持ち，更に今後の生活に生かしていこうとする姿が見られた。

また，生徒はそれぞれのプログラムでの学びを通して，自分らしく生きるためのスキルの良さを実感し，持続可能な社会創りを志向した自分の在り方についても考え，実践していこうとする姿が見られた。

これらは教科の一例であるが，各教科でのパフォーマンス評価における記述や振り返りから，生徒が主体的に取り組むパフォーマンス課題の設定や適切なルーブリック等による評価とともに，振り返り等においてじっくり自分の取組について振り返り評価する機会を保障することで，生徒は各教科の本質に迫るとともに，論理的思考力などの汎用的な力の高まりを感じ，以降の学習や生活に持続可能な社会を志向して取り組もうとする姿が見られた。

また，３か年を通して，各教科におけるパフォーマンス評価事例の積み重ねを行うとともに，教科間で事例検討を行うことで，資質・能力が確かに育つ評価の在り方に迫ることができた。理科や保健体育，技術・家庭科等での，実技を伴うパフォーマンス課題の在り方についても検討を行い，インタビュー形式のレポートなど，思考力や表現力をよりよく見取る課題や評価の作成にあたることができた。

２　教員アンケートから

教員からは，３年間の研究における成果や課題について次のようなものがあがった。

（○成果，▲課題）

（論理的に思考し表現する学び合いの育ちについて）

○　物事を論理的に表現する力は確実に付いてきている。記述での表現だけでなく，人前でも言葉にして臆せず考えを論理的に表現できている。

○　全校で取り組んでいる問答ゲームや各教科での取組の中で，生徒の論理的思考力は確実に育っていると思う。答えに対する根拠を問いながら，疑問点を納得のいくまで追求する姿勢も見られた。

○　特に，問答ゲームは簡単にできて，共通の学びとして活用できて，とても良い。生徒総会での生徒の話し合いや会の進め方の姿などは，育ちの現れの一つだと思う。

○　特に，論理的に思考し表現する力については，生徒たちの授業の姿だけではなく，日々の生活，部活動でも身に付いた姿を見ることができた。

▲　自分の思いをすべて言葉にして，文量が多くなることがある。今後，端的に表現できるように指導したい。

▲　問答ゲーム等で培った表現力は育っていると実感できる。一方でそれを活用した思考については，まだまだ「身に付いている」といった段階ではないように思う。研究の内容・方法として，未知の課題に出会ったときには，「論理的な思考を発揮させるような場や指導および評価の工夫が十分」というだけでは対応ができない。

▲　授業の中では各教科で身に付けた力を発揮できているが，集会や道徳の時間でそれが発揮されるとさらに良いと思う。

（持続可能な社会を支える資質・能力の育ちについて）

○　多くの生徒が，持続可能な社会に参画することを価値とする考え方や生き方が身に付いてきているのではないかと思う。持続可能性を念頭に課題を解決しようとする姿勢が随所に見られた。
▲　「持続可能な社会を築く」ことに価値を見いだす指導について，工夫はしたものの，本当にそのような育ちがあったのか疑問である。なぜ勉強するのか，目先のことだけでなく，将来にも目を向けて学び続けていこうとする生徒が育っているのかと考えると，授業研究をもっと深めていかねばならないと思う。
▲　表現力という点では，問答ゲームを行ったり，どの教科も授業中もアウトプット活動に力を入れたり，成長が見られていると思う。しかし，自治という点では，持続可能な社会を支える資質を育てるという点でも，まだまだ教師の支援がいるように思う。

教師の側から見ると，論理的に思考し表現する学び合いの工夫により，各教科における多様な表現力や授業の本質の理解に向けた思考力，それらの生活への活用など，生徒の論理的に思考し表現する力の高まりが見られた。その反面，教科横断的な学習や教科外の活動における論理的思考力・表現力を生かした取組，自ら身に付けた資質・能力を実践に移していくことについては課題が見られた。

3　まとめと今後の研究の展望

全校及び教科領域でＥＳＤの視点に立った問題解決的な学習の在り方について，生徒の論理的に思考し表現する学び合いを通した研究・実践を進めてきた結果，確かな生徒の育ちを見取ることができた。

教科で設定した目指す生徒の姿は，課題追究の過程で随所に見取ることができるようになってきた。今後，各教科での検証から見えた成果と課題を集約し，総合的に生徒の育ちがどうであったかを検証していく必要がある。また，各教科での学びが他の場面（行事などの学校生活や日常生活）において実践力として発揮することについては課題が見えた。各教科での学びをもとに，持続可能性を志向しつつ更に実践の場で活用していくことで，生徒の実践力が高まると考える。

これからの子どもは，将来の変化を予測することが困難な時代を生き抜かなければならない。さらに，将来を見通したよりよい社会を創るために，現在自分たちが置かれている状況を踏まえながら，様々な問題を解決していくことが求められるであろう。このような持続可能な社会を形成する一員となるためには，一つ一つの課題を自分ごととして捉え，経験や既習の知識，スキルをもとに，思考力・判断力・表現力を発揮して，よりよい解決方法を考えるとともに，その実現に向けて最善を尽くすことができるという，資質や能力を育む必要がある。

しかし，主体的に持続可能な社会を形成していくためには，そうした資質・能力を身に付けるだけでは不十分である。それらに加えて，明確な目標を設定し，その実現のために責任と自覚を持って行動に移すことのできる実践力を身に付ける必要があろう。このようなＥＳＤの視点に立った実践力を学校全体で体系的に育むことは，これからの時代に求められる学びの形を創り出す上でも，その学びを通して，将来をよりよく生き抜く資質や能力を高める上でも重要であると考える。

以上のようなまとめを基に，次研究サイクルでは，ＥＳＤの視点に立ち，生徒の論理的に思考し表現する主体的な学び合いを通して育った生徒の姿から，次代のよりよい社会を生涯にわたって支え続けることができるような資質・能力の更なる育成につなげるために，必要な研究の方策について更に議論し，研究に励んでいきたい。

お わ り に

第98回愛媛教育研究大会は，平成最後の大会となりました。平成30年は，国内でも県内でも異常気象による甚大な災害が起こり，国際情勢においても大きな変化が見られた年でした。また，情報化社会の急速な発展は私たちの日常生活の中でも実感するようになり，まさに時代が大きく変わろうとしています。

そのような中，平成29年３月告示の学習指導要領では，「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される子どもたちが，急速に変化し予測不可能な未来社会において自立的に生き，社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成すること。」と示しています。これは，これからの新しい時代の学校の方向性を示したものであると思います。

本校では，研究主題を「持続可能な社会を支える資質・能力の育成―論理的に思考し表現する学び合いを通して－」と掲げ，本校の教育目標「自立と共生の力をもつ生徒の育成」を目指して教育活動を展開してきました。最終年度は，①言語技術を効果的に活用しながら，教科等の見方・考え方を働かせて問いの解決に向かう深い学びを実現する学習の創造②資質・能力の育成を見取る評価，評価を通した自覚・価値の醸成の研究に力を入れ，実践を積み重ねてきました。

３か年継続研究の最終年次のまとめとして，研究パートナーである愛媛大学の先生方や公立学校の先生方からご指導・ご助言を賜り，研究成果をご報告できますことに深く，感謝申し上げます。

生徒たちは教科の学習では，パフォーマンス課題を難しいが楽しいと，課題解決に向けて粘り強くチャレンジしていました。道徳，総合的な学習の時間（行く河・自主協働）では，多様な価値を認め，よりよい社会や自分の姿を思い描き，他と協調しながら進んで行動しようとしていました。学級・生徒会活動や学校行事，部活動では，問題の解決に向けて，自ら考え，見通しを持って行動し，修正・改善しようとしていました。この３年間で，自信を持って自分の意見を表明し，自治の力でより良い学校を自分たちで創っていこうとする気運が高まってきました。そして，次代を担う子どもたちが明るく元気に未来社会の創り手として育っていく姿は，大変頼もしく，私たちに喜びと勇気を与えてくれました。

生徒の育ちを励みとしながら一丸となって真摯に研究に取り組む「チーム附中」は，本日，賜りました貴重なご意見・ご指導を次期の研究に生かし，これからもモデルに値する実践研究となるよう精進してまいりたいと思います。

最後にご後援をいただきました愛媛県教育委員会，愛媛県市町教育委員会連合会，松山市教育委員会，愛媛県小中学校長会，愛媛県教育研究協議会，公益財団法人愛媛県教育会をはじめ，ご指導・ご支援いただきました多くの方々に衷心より感謝申し上げますとともに，今後とも本校教育の推進にご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2019年２月

愛媛大学教育学部附属中学校　副校長　渡　部　ゆかり

研究アドバイザー

愛媛大学大学院教育学研究科　教授　城戸　　茂

研究同人及び愛媛大学研究パートナー

校　長　小助川　元太　　副校長　渡部　ゆかり

教科領域	研　究　同　人	愛媛大学研究パートナー
国　　語	細川　美保・大上　航太 丸山　佑樹	三浦　和尚
社　　会	江角　紀行・西田　剛志 宮本　真人	井上　昌善・鴛原　　進・川岡　　勉 川瀬久美子・張　　貴民
数　　学	宇都宮憲二・山本　泰久	河村　泰之・原本　博史 平田　浩一・吉村　直道
理　　科	岡本　慎次・沖野　俊也 真木　大輔	佐野　　栄・隅田　　学 向　　平和・山﨑　哲司
音　　楽	三棟　優子	井上　洋一・木村　勢津・楠　　俊明
美　　術	野口　理佳	秋山　敏行・福井　一真
保健体育	坪内　道広・古澤　龍也	糸岡　夕里・日野　克博
技　術 家　庭	斧　　純司	大西　義浩・森　慎之助
	土手　佳代	竹下　浩子
英　　語	向井　俊博・河野　　操 河野　圭美	池野　　修・立松　大祐
行く河	冨永　剛志・右近友美子	富田　英司

(50音順)

表紙絵に寄せる思い

新緑の中の講堂

１年　松田　恵実

私は学校の中で，章光堂が一番好きです。桜の季節に章光堂で行われた入学式は，新しい制服を着た喜びや，建物のさわやかな色彩，先輩方の美しい歌声と共に心に残る思い出です。

青葉写生会では，私の心に映っている章光堂を描きたいと決めていました。立体感を出すために，正確に形を見ることや，影になっている所の微妙な違いに気を付けて描きました。見た通りに描いたり，色を塗ったりするのは難しかったです。

もっと水彩画について勉強し，様々な表現ができるようになりたいです。

中表紙絵に寄せる思い

秘密の階段

３年　中里　実咲

春のやわらかな日差しを受けながらひっそりとたたずんでいる階段を見付け，一目見ただけで，ここを描こうと思いました。

実際に描いてみると，木々の緑や春の日差しを表現するのはとても難しかったですが細かな部分まで丁寧に描きました。また，若葉の色や木々に当たる光を上手く表現できるよう工夫しました。

一生懸命描いたこともあり，附属中学校での３年間の学びの集大成としてふさわしい作品ができたのではないかと思います。また，春の穏やかな風景を作品として描くことができ，嬉しかったです。

2018 愛媛大学教育学部附属中学校研究報告集　第50号

平成31年２月

発行者　愛媛大学教育学部
〒790-8577　松山市文京町３番
TEL 089-927-9371
愛媛大学教育学部附属中学校
〒790-0855　松山市持田町１丁目５－22
TEL 089-913-7841　FAX 089-913-7842

印刷所　株式会社　松栄印刷所
〒790-0003　松山市三番町７丁目９－２.
TEL 089-941-3334　FAX 089-933-7911

表紙作品：青葉写生会　絵画（水彩）「新緑の中の講堂」　１年　松田　恵実
中表紙作品：青葉写生会　絵画（水彩）「秘密の階段」　３年　中里　実咲